武蔵野幕屋 日曜聖書講筵

忘れな草

――エレミヤ記第2章14～37節――

１９７４年２月17日
小池辰雄

アッシリヤの奴隷　神をすてる　偶像崇拝　霊法の支配　忘れな草　我は汝を忘れず棄てず　無教会の驍将　キリストを忘れない

【エレミヤ2】

14 イスラエルはしもべなるか　家にうまれし僕なるか　いかにして虜掠となれるや 15 わかき獅子かれにむかいて哮え その声をあげてその地を荒らせりその諸邑は焚かれて住む人なし 16 ノフとタパネスの諸子も汝の頭首の髪をくらわん 17 汝の神エホバの汝を途にみちびきたまえる時に　汝これを棄てたるによりて此事汝におよぶにあらずや 18 汝ナイルの水を飲まんとてアッスリヤの路にあるは何故ぞ 19 汝の悪は汝をこらしめ　汝の背は汝をせめん　斯く汝が汝の神エホバをすてたると 我を畏るることの汝の衷にあらざるとは 悪く且つ苦きことなるを汝見てしるべしと 主なる万軍のエホバいい給う

20 汝昔より汝の軛をおり　汝の縛を截ちていいけるは　我つかうることをせじと 即ち汝すべての高山のうえと諸の青木の下に妓女のごとく身をかがめたり 21 われ汝を植えて佳き葡萄の樹となし　全き真の種となせしに いかなれば汝われに向いて異なる葡萄の樹の悪き枝にかわりしや 22 たとい嚥哨をもて自ら濯い またおおくの灰汁を加うるも 汝の悪はわが前に汚れたりと主エホバいい給う 23 汝いかで我は汚れずバアルに従わざりしということを得んや　汝谷の中のおこないを観よ 汝のなせしことを知れ 汝は疾走るわかき牝の駱駝にしてその途にさまよえり 24 汝は曠野になれたる野の牝驢馬なり 其欲のために風にあえぐ その欲のうごくときは誰かこれをとどめえん 凡てこれを尋ぬる者は自ら労するにおよばすその月の中に之にあうべし 25 汝足をつつしみて跣足にならざるようにし　喉をつつしみて渇かぬようにせよ しかるに汝いう 是は徒然なり 然りわれ異なる国の者を愛してこれに従うなりと

26 盗人の執えられて恥辱をうくるがごとく イスラエルの家恥辱をうく 彼等その王その牧伯その祭司その預言者みな然り 27 彼等木にむかいて汝は我父

なりといい また石にむかいて汝は我を生みたりという 彼等は背を我にむけて
其面をわれに向けず されど彼等 災 にあうときは 起ちてわれらを救い給え
という 28汝がおのれの為に造りし神はいずこにあるや もし汝が災にあうとき
かれら汝を救うを得ば起つべきなり そはユダよ汝の神は汝の邑の数に同じけ
ればなり
29汝等なんぞ我とあらそうや 汝らは皆我に背けりとエホバいい給う 30我が
汝らの衆子を打ちしは益なかりき 彼等は懲治をうけず 汝等の剣は猛き獅子の
ごとく汝等の預言者を滅ぼせり 31なんじらこの世の人よエホバの言をきけ 我
はイスラエルのために曠野となりしや 暗き地となりしや 何故にわが民はわれ
ら徘徊りて復汝に来らじというや 32それ処女はその飾物を忘れんや 新婦は
その帯をわすれんや 然ど我民の我を忘れたる日は数えがたし 33汝愛を得んと
て如何に汝の途を美くするぞよ されば汝の行いはあしき事を為すに慣たり
34また汝の裾に辜なき貧 者 の生命の血あり われ盗人の穿ちたる所にて之を
見ずして すべて此等の上にこれを見る 35されど汝いう われは辜なし 故にそ
の怒りはかならず我に臨まじと みよ汝われ罪を犯さざりしというにより 我汝
とあらそうべし 36なんじ何故にその途を易んとて迅くはしるや 汝アッスリヤ
に恥辱をうけしごとく エジプトにも亦恥辱をうけん 37汝両手を頭に置きて
かしこよりも出去らん そはエホバ汝のたのむところの者を棄つれば 汝彼等に
よりて望みを遂ぐること無るべければなり

●アッシリヤの奴隷

今日は、エレミヤの2章の14節から37節です。

14イスラエルはしもべなるか 家にうまれし僕なるか いかにして虜掠となれるや（文語訳）

14イスラエルは奴隷であるか、家に生れたしもべであるか。それならなぜ捕われの身となったのか。（口語訳）

口語訳では、「僕」を「奴隷」と訳してありますね。「僕なるか」と、神さまはイスラエル及びユダに向かって言う。この「イスラエル」という言い方は、この場合はユダも含めた言い方であると思います。「僕」たる自覚、神さまに「仕える者」というわけです。ですから、「奴隷」という訳よりも、むしろ

「しもべ」

と訳した方がいい。「奴隷」というと何か少し封建的な気持が強くなってくる。「しもべ」、女性なら「はしため」という位置付けです。神さまはイスラエルをしもべとして、この主従の関係でみておられるわけです。

「お前は本当の私の僕か。それなら囚われの身となるわけではなかったのだ。ところが、お前は本当の僕でなかったから、即ち背いたから、それでアッシリヤとバビロニヤの囚われとなった」

と。この場合はまだアッシリヤだけで、エレミヤはまだバビロン捕囚まで言ってません。しかしそのことはもうエレミヤは預言で知っているわけです。特に北イスラエルはアッシリヤの奴隷になってしまったから。囚われになってしまった。だから、

「いかにして捕らわれとなったか」

と。アッシリヤの囚われとなったか。アッシリヤに限らず、精神的にはエジプトの囚われにもなった。即ち、アッシリヤに傾いたり、エジプトに傾いたり、またバビロニヤに傾いたりというようなわけです。日本がもし本当の意味の自主外交がないとすれば、アメリカになったり、中国またソ連となったり、いろいろ気持を傾けてはどうのこうのということ。即ち、イスラエルは神への信を貫いて、僕たる実存を示さなかった。それがとうとうこのような囚われとなったということです。囚われとなるということは、具体的に囚われる前にもう精神的に囚われになっているわけだな。ですから、

イスラエルはしもべなるか 家にうまれし僕なるか

「家にうまれし」ですから、本来の、エジプトから出エジプトさせたのは本当にわが民として、「家にうまれし」という、そういった古い歴史的ないわれを言っているわけです。もっと遡れば、アブラハムからです。伝統であるわが民としての、わが子らとしての「家にうまれし」という、その内容はそういった含みもあるかと思います。

15 **わかき獅子（しし）**

というのはアッシリヤです。

かれにむかいて哮（ほ）えその声をあげて その地を荒らせり

正にその通りです。その中心のサマリヤが滅びた、紀元前721年に。

その地を荒らせり その諸邑（まちまち）は焚（や）かれて住む人なし 16 **ノフ**

「ノフ」はカイロの南方約20キロのナイル河の左側にあるそうですが。

とタパネスの諸子（こどもら）も汝の頭首（かしら）の髪（け）をくらわん

「タパネス」、これもナイル河流域の地です。即ちエジプトの方ですね。

●神をすてる

17 **汝の神エホバの汝を途（みち）にみちびきたまえる時に**

即ち曠野の道です。

汝これを棄てたるによりて此事汝におよぶにあらずや

というのはこの捕囚のことです。即ち、災いまた国の民としての恥辱。

18 **汝ナイルの水を飲まんとて**

「ナイル」は「シホール」とも読める。即ちエジプトの助けとかエジプトの恵みです。

エジプトの路にあるは何ゆえぞ

今度はエジプトの方に傾いているわけです。

また河の水を飲まんとて

今度はアッシリヤの方です。西に傾き東に傾きというわけです。「河」というのはユーフラテスの河のことです。

アッスリヤの路にあるは何故ぞ 19 **汝の悪は汝をこらしめ 汝の背は汝をせめん**

どっちかというと、背きの方が原因になります。背きから邪悪ということになる。

斯く汝が汝の神エホバをすてたると我を畏るることの汝の衷にあらざるとは

「我」というのは「エホバなる我」ということです。

悪く且つ苦きことなるを汝見てしるべしと 主なる万軍のエホバいい給う

預言者エレミヤが神さまの言を伝えているわけです。

「神をすてたる」

「我を畏ることの汝の衷にあらざる」

という。ここに「神をすてる」という言葉がある。

20 **汝昔より汝の軛をおり 汝の縛を截ちていいけるは 我つかうることをせじと**

即ち奴隷がそういった状態ですから、それで「つかうることをせじ」と。

というのは、カナン民族の礼拝ですね。それになびいたわけです。偶像崇拝がそういった青木の下でなされたという。

21 **われ汝を植えて佳き葡萄の樹となし 全き真の種となせしに いかなれば汝われに向いて異なる葡萄の樹の悪き枝にかわりしや**

これはイザヤ書の5章に出ているように、正にあれと相応ずるわけです。せっかくの甘い葡萄ができるはずなのが、酸っぱい葡萄になってしまったという。

「1 **われわが愛する者のために歌をつくり 我があいするものの葡萄園のことをうたわん わが愛するものは土肥たる山にひとつの葡萄園をもてり**

「葡萄園」とはイスラエルのことです。この場合の「愛するもの」とはエホバです。

2 **彼その園をすきかえし石をのぞきて嘉葡萄をうえ そのなかに望樓をたて**

見張りですね、外敵が来たり動物が来て荒らすから。

酒槽をほりて嘉葡萄のむすぶを望みまてり 然るに結びたるものは野葡萄なりき」（イザヤ5・1～2）

実をむすぶのを待った。しかし酸っぱかったと。今のこのエレミヤ記と相通ずるところです。

●偶像崇拝

22 **たとい嘘吟をもて**
原語では「メテール」という字ですが、アルカリ性のものです。
自ら濯い またおおくの灰汁を加うるも 汝の悪はわが前に汚れたりと
「灰汁で洗う」というようなことはヨブ記9章の30節にもあります。
主エホバいい給う 23 汝いかで我は汚れずバアルに従わざりしということを得んや
「バアル」の複数が「バーリーム」です。
汝谷の中のおこないを観よ
モロクの神に人身御供を献げるやつが、この非常に悪い偶像ですが。「谷の中のおこない」というのがそのことです。
汝のなせしことを知れ 汝は疾走るわかき牝の駱駝にしてその途にさまよえり
「牝の駱駝」というのはどうも、そういった性的衝動の強いやつらしい。それであっちへ行ったりこっちへ行ったりするらしい。
24 **汝は曠野になれたる野の牝驢馬なり 其欲のために風にあえぐ その欲のうごくときは誰かこれをとどめえん**
エレミヤもいろんな自然現象を観察して知っているわけです。
凡てこれを尋ぬる者は自ら労するにおよばすその月の中に之にあうべし 25 汝足をつつしみて跣足にならざるようにし 喉をつつしみて渇かぬようにせよしかるに汝いう 是は徒然なり 然りわれ異なる国の者を愛してこれに従うなりと
「はっきりと偶像崇拝のことを肯定してやっている。とんでもないはなしだ」
といって、非常に責められている。それでイスラエルは滅び、同じくユダもそのうちに滅びるぞ、そんなことをしていれば、というわけです。
26 **盗人の執えられて恥辱をうくるがごとく イスラエルの家恥辱をうく 彼等その王そのその祭司その預言者みな然り**
王と牧伯と宗教的な祭司と預言者と、一番その国の首になるところの人たち、代表的な地位の者たちがみんなダメだ。預言者も偽りの預言者だというわけです。エレミヤがただ独り立って戦っているわけです。
27 **彼等木にむかいて**
いわゆる神木というやつです。
汝は我父なりといい
とんでもないはなしです。
また石にむかいて
石の柱を立てる。讃美歌320「主よみもとに」の中に「石の柱を立てる」という言葉があるね。

あれもちょっとそういった宗教的現象の一つが、アブラハム・イサク・ヤコブのあの辺の時にはあったわけだね。だから、あの節〔4節〕は私はたいてい歌わない。

汝は我を生みたりという 彼等は背を我にむけて其面をわれに向けず
背を向けて顔は向けないという。そっぽを向いてしまう。反対の方を向いてしまう。

されど彼等 災にあうときは 起ちてわれらを救い給えという
勝手なことを言う。そんな普段の実存がいい加減で、自分から背いていて、いざとなるというと「助けろ」なんて言ったってそれはダメだと。

28 **汝がおのれの為に造りし神はいずこにあるや もし汝が災にあうときかれら**
汝を救うを得ば起つべきなり そはユダよ汝の神は汝の邑の数に同じければなり
偶像がそれほどたくさんいると。こういうわけです。まぁ日本の状態もいろんな意味の偶像がありますから、何も石の像でなくても。

29 **汝等なんぞ我とあらそうや 汝らは皆我に背けりとエホバいい給う 30 我が汝らの衆子を打ちしは益なかりき**
少しは目が覚めるかと思うけれどもダメだと。

彼等は懲治をうけず 汝等の剣は猛き獅子のごとく汝等の預言者を滅ぼせり
非常に頑迷固陋、頑なだというわけです。この場合の「預言者」はいい意味でしょうね。マナセ王が預言者を迫害したことが列王記略下の21章に出ているわけですが、そんなことが考えられている。

●霊法の支配

31 **なんじらこの世の人よエホバの言をきけ 我はイスラエルのために曠野となりしや**
曠野を通って来たけれども私は曠野ではない。曠野でもってお前たちを放っておいたか。そうではない。いつも導いて顧みていたではないか。天からマナを下したではないかと。

暗き地となりしや
暗き地を通ってきた。けれども、決してエホバは暗き地ではない。暗き地をもなお導いてきた。光となり、夜は火の柱となり、昼は雲となって。

何故にわが民はわれら徘徊りて復汝に来らじというや
もう精神的な病膏肓に入っているわけですから、エレミヤがこういうようなことを言うということは、よほどユダもひどかったらしいですね。

32 **それ処女はその飾物を忘れんや**
女の子は飾り物を忘れない。装身具ですね。

新婦はその帯をわすれんや 然ど我民の我を忘れたる日は数えがたし

「我を忘れたる日は多くして数えがたし」

と。今日はこの「忘れな草」という題を出したのはここからきたわけです。

33 汝愛を得んとて如何に汝の途を美くするぞよ

この「愛」というのは正しい愛ではない。

されば汝の行いはあしき事を為すに慣たり 34 また汝の裾に辜なき貧者の生命の血あり われ盗人の穿ちたる所にて之を見ずして すべて此等の上にこれを見る

「此等の上に」というのは、その裾の上にその血のあとを見るという。

35 されど汝いう われは辜なし 故にその怒りはかならず我に臨まじと

勝手なことを言っていると。

みよ汝われ罪を犯さざりしというにより我汝とあらそうべし

我は汝のさばきを始めるべしと。

36 なんじ何故にその途を易んとて迅くはしるや

アッシリヤから外れれば今度はエジプトに行ってみたり、エジプトに外れれば今度はバビロニヤに行ってみたりというような始末です。大体、エジプトに傾いていた。

汝アッスリヤに恥辱をうけしごとく エジプトにも亦恥辱をうけん

そんなものに依頼んだってダメだと。「アメリカだ、ソ連だ」ではないというわけです。

37 汝両手を頭に置きてかしこよりも出去らん そはエホバ汝のたのむところの者を棄つれば

神を忘れ、神を棄てたから、

汝彼等によりて望みを遂ぐること無るべければなり

こういうわけです。非常にはっきりした内容です。

要するに、神を棄て神を忘れた。そして、右往左往、左顧右眄が結局、民族としてもあるいは個人の在り方としても、それはみな滅びに向かっていくという。これはどの歴史をみても。歴史は決して偶然が支配していない。或る法則が、霊法が、道徳法が、やはりこれを支配している。どんなにそれがゆがんでいるように見えても、実は大きな線ではちゃんとそのようになっていきます。一時はおおいに悪い奴が栄え、不義なことがまたのさばって、いいように思えても、必ずたおれていく。片一方は負けたようだけれども、実は本当は勝っている。ヒルティが

「道徳的世界秩序」(Sittliche Weltordnung)

ということをよく言いましたが。「道徳的」ということはもっと宗教的な本当の道だよね。

「我は道なり」

という。道は曲がっているようだが、実は曲げられないんだと。その道はいったい何かというと、具体的には、

「神を棄てまた忘れる」
ことは道ならざることですから。
「私を忘れたその日は数えがたし」
という、神さまが。

●忘れな草

「忘れな草」というのは、神話では、草の花の神さまがいろんな花に名をつけてやった。ところが、ある花は自分がつけられた名を忘れてしまった。バラだとか、スミレだとか、ナデシコだとか、いろいろ名をつけられたわけだ。ところが、忘れな草は自分の名前を忘れてしまったので泣いていたという。そこで女神が、

「どうして泣いているか？」

「せっかくいただいた名前を忘れてしまいました」

「それでは、『私を忘れるな』というのをお前の名にしてあげよう」

といって、一番素晴らしい名をもらってしまった。

「フォアゲット ミー ノット」(forget me not)

「フェァギス マイン ニッヒツ」(Vergiß mein nicht)

という。……。それと、もう一つある。これはもう少し人間的な伝説です。ドナウ河のほとりに一組の――集会のヨルダン〔青年男子組〕とサフラン〔女子組〕みたいな人たちだよな――男女が散歩していた。そしたらば、河の島の中に小さな青い花が咲いていた。それをその青年が採りに行った。そして帰ってくる時に足を踏み外してしまって急流の中に落ちた。そこで「フェァギス マイン ニッヒツ」と叫んで、その恋人に自分の摘んだ花束を投げて、そして水の中に没してしまった。そこでその恋人はその花をいつまでも覚えて、この沈んだ青年のことを一生忘れなかった。それがこの「フェァギス マイン ニッヒツ」のもう一つの伝説だそうです。

それはまぁそうとして、我々においてはこの「フェァギス マイン ニッヒツ」の「マイン」は即ち神さまですから。神の言として、キリストの言として、「我を忘れるな」と。

「私はお前を忘れない」

と、まずそれが先にたつ。これはイザヤ書の44章を見てごらん。21節、

「忘れる」の反対は「心にとめよ」「ハルテ イン ヘルツェン」(halte im Herzen) という。

[21]**ヤコブよイスラエルよ 此等のことを心にとめよ**
汝はわが僕なり」（**イザヤ44・21**）

ここでもはっきり言っている。「汝はわが僕である」と。即ち

「私の心を行ずる者である」

ということですよ。「僕」というのは神さまの心を行ずる者。即ち、キリストは聖意体現で、

正に僕である。

「汝の御意をなさせたまえ。どうぞ私をお使いください」

と、キリストは僕たる自覚が一番強かったわけです。「エホバの僕」「エベット ヤーヴェー」という。とにかく、旧約聖書ではイザヤ書は何といってもその意味では最高です。イザヤ書だけ引き破ってポケットに入れてくといいよ。そして、時々読んでね。引き破らなくてもいいから、自分でもってイザヤ書を写すといいです、詩の形に。こないだの34号〔「ハレルヤ」〕にも書いておいたように。

●我は汝を忘れず棄てず

「21ヤコブよイスラエルよ 此等のことを心にとめよ 汝はわが僕なり 我なんじを造れり なんじわが僕なり イスラエルよ 我はなんじを忘れじ」（イザヤ44・21）

「私はお前を忘れない。他の人はみんな忘れて、棄てられたと思うけれども、私はお前を棄てない」

と。「忘れない」ということと、「棄てない」ということは一つです。心に忘れなく、また行動的に棄てない。私はお前を棄てない。忘れず棄てないという。

「お前がどうあろうと、絶対に私はお前を救っていく」

と。これが本願の心です。「忘れず棄てず」というのが本願の心です。これが本願であり神意である。神意というのは何か恐ろしいことではない。神意というのは非常な恵みです。

「神意というのは一体どういうのでしょうか？」

なんてね。「どういうの」もへったくれもない。神さまが、

「お前を絶対に棄てない、忘れない。お前を使うぞ」

と。その神意、そこにおいて神の栄光が現れる。それをハタと受けとるのが、さっきのお話の祈りに通ずるんです。

まぁこの世の運命環境を整えようとしたって、整いっこないです。整ったって、どうにもならんです、整えてみたところで。整ってみると、今度は空虚を感ずるですよ（笑）。そんなもんです。空虚のない世界は、満ちあふれて限りない世界は、このキリストをもつ世界です。もう人間の魂はそういうように出来ているんだよね。それでなければ、本当の歓びも力も生命も来ないように出来ているんだ、人間の魂は。素晴らしく創られている。世界に不思議なるものは人間の魂が一番不思議なんだ。

だから本来、仏性を、神性をもっているんです、魂は。それをプロテスタント神学があまり切ってしまってね、質的に。それで何かおかしなことにしてしまっているからいかん。存在は神性を、「ゴットハイト」(Gottheit) をもっている、我々は。キリストは我々のことを、

「神々」

とすらも仰った。神に創られたものが神性をもたないでどうしますか。本来、神に創られたものです。ただそれがなぜ、ここにある偶像崇拝だとか、悪いことにしょっちゅう傾くかというと、それは要するに、神を忘れ、神を棄てているから。即ち、神との繋がりが切れてしまった。

私は「宗教と教育」という論文を、エッセイみたいなものを今月中に書いてしまう。これは獨協学園の90周年の記念号に出す。もうはっきり書いてやる。言葉の一番深い意味における宗教心を失ってしまった一番の責任は、小学校から大学にいたるまでの先生にある。我々教師が元凶なんです。日教組も元凶だけれども、日教組なんて言っているよりか、我々自身です。まぁ私が教育界にいる限りは絶対にそのことを唱えていきます。

その神を忘れ神を棄てる。これがイスラエル・ユダが滅びるはっきりとした原因である。神さまは、

「私はお前を忘れない、棄てない」

という。イザヤ書44章の22節、

「22**我なんじの愆(とが)を雲のごとくに消しなんじの罪を霧のごとくにちらせり**

雲散霧消してしまったという。雲消霧散した。雲の如く消し、罪を霧の如くに散らせりと。なかなかイザヤは詩人だよな、表現も。

「既に贖い取ったから帰れ」

という。「帰ってきたら贖ってやるぞ」ではない。

「もう贖い取ったから、お前は帰らざるを得ないではないか。どこをうろついているか」

と。もの凄い引力をもっている。もう私はイザヤの中、聖書の中で一番好きな句の一つです、このイザヤ44章21～23節は。

23**天ようたえうたえ エホバこのことを成したまえり 下なる地よよばわれ もろもろの山よ 林およびその中のもろもろの木よ こえを発(はな)ちてうたうべし**

こんな福音だから、お前たち自然も歌ったらよかろうと。

エホバはヤコブを贖(あがな)えり イスラエルのうちに栄光をあらわし給わん」（イザヤ44・22～23）

第二イザヤもこのイスラエルの民のどん底において最高のことを歌っている。行き詰まったと思った時に、これはもうどうにもならない八方塞がりと思った時に、最も凄いことが展開してくる。この神さまの憐れみ、キリストの生命、それはもう新約にくるというと、それが聖霊として私たちの中に臨んでくるからね。だから、もの凄い。

●無教会の驍将

私は手島君をなぜ、あのようにはっきりと評価するかというと、彼はとにかくこの日本

のキリスト教史においてはっきりと聖霊のことを証したからです。人間手島君にはいろいろ私とは合わない面もあるでしょうけれども、そういうことではない。しかし、彼は本当に神の前にまた平伏す人でもあった。手島君の群の人たちは本当に謙虚です。

「今度の記念号〔「生命の光」〕は特別に分厚くなってしまったけれども、先生の文章が載ったので私たちは本当に喜んでいる」

と感激しながら言う。吉村君と土田君の書いたものはよく読んでください。実によく書いてある。吉村君が巻頭にこう書いている。

「１９７４年原始福音新年聖会、無教会の驍将（ぎょうしょう）小池辰雄先生を迎えて」

なんていう一文がある。私のことを驍将だってさ、力ある将軍ということです。

「手島先生は１９７４年の新年聖会に特別講師として三十年来の友人であられる小池辰雄先生（前東大教授、現獨協大学教授）を託して逝かれた。小池先生は藤井武先生の直弟子として無教会陣営の驍将（ぎょうしょう）である。１９５０年11月阿蘇高原に幕屋ペンテコステが起こるや異言状況すさまじく、その翌日、熊本幕屋における預言者的実存と題する講義は言々句々学者の如くならず権威ある者の如くパトス的に吐露された。その頃、先生が熊本駅頭に降り立たれる時は異言状況で、手島先生もたじたじとされるほどであった。爾来、原始福音伝道を見守り、時には手島先生と講壇を共にし、あるいは堂々と論陣を『生命の光』誌にはられた。元旦の新年聖会は果然、手島郁朗先生の弔い合戦となったが、会場の東京社会文化会館大ホールには手島先生を追慕して全国から二千名もの教友が詰めかけた。先生のご遺訓のようにキリストの火に燃やされんことを祈るや、会場には嵐のような霊火霊風が巻き起こりどよもした。ペンテコステは繰り返す。友よ、立って続使徒行伝を共に綴ろうではないか」

なんていう文章です、なかなか勇ましい。まぁ後で皆さんにお分けしますが。それで昨日やって来て、50冊ばかり置いていった。それで、

「この７月23日～25日に伊豆の伊東で二千人位集めて大集会をしますので、先生、是非ともお願いします」

なんて（笑）、そんなことになってしまった。勿論私が全部やるわけではないでしょうけれども、

「是非ひとつお話を願いたい」

と言うから、

「じゃぁやるよ」

と言って返事しておきました。８月23日～25日は君たちとやります。そんなことでこちらもクズグズしていられないです。

それから、伝道者の群があるんだよね、40人位の。それが時々集まって研修会をやる。

「その時も是非お願いします」

なんて言ったからね、まぁそっちの方ははっきりした返事はしなかった。何も私は手島さんの代わりをやろうとは思いませんけれども、彼らの一端は荷なってやろうと思っています。それは手島君に対する私の友情としてです。人の群を

「こっちが肩代わりしよう」

なんていう、絶対にそんな気持はないですから。そして、もうむしろ彼らの信者は増えてきているそうです。私ははっきり言った。

「本当に御霊の世界なら絶対に滅びはしない。人数は問題ではないんだ」

と。無教会では、主催者が亡くなるとその雑誌は廃刊なんです。『生命の光』も廃刊にしようかという説も中にはあったそうです。

「それで少しそういうことも考えてもいる」

と言うから、

「何を言うか。『生命の光』は手島さんのものではない。手島さんは御霊に導かれてやった。君たちは先生中心ではないだろ。御霊の福音のためならばバトンタッチして、『生命の光』という御霊の雑誌として君たちが、いわゆる先生なしのあれをやって行け。私はそれが本当の道だと思う」

と言ったら、

「先生にそう言っていただいて、非常に安心しました」

なんてなことでしたけれども（笑）。

●キリストを忘れない

この御霊の世界は私心がないですから、本当に強いんです。それが何か私心が勝っているというと、本当の力は来やしないですから。そういうわけで、君たちの在り方も、もうガリラヤ〔壮年男性組〕の諸君もそろそろ土曜集会でもお始めになって一向差し支えない。

とにかく、日本の本当の魂の教育は、御霊の子らに託されている。何も学校ではないです、教育は。そういう意味において、どうぞ、会社の人でも何でもいいから、二、三人あれしてですね、おっ始める。やはり御霊の権威というものは、深い救い上げの力をもっているから、何もいばりくさるのではないから、救いの力をもった権威だから。魂はみんな何か飢えているんですよ。そして、何か拠り所がほしいわけです。

病院なら、藤腹さんや橋本さんあたりが大いにやっていただいて結構なんです。

「時には話しに来てください」

というなら、行くよ私はいくらでも。これを宝の持ち腐れにしてはいかん。宝の持ち腐れをやっていると、本当に腐ってしまうから、力がなくなってしまう。それはもうどしどし泉のごとくに流していく。誰れかれとか、どういう所でとか、ということはないんですよ、本当の伝道というものは。その「誰れかれ」といったって、それは何も求めていない奴に

片っ端からという意味ではないけれども。そして、この「ハレルヤ」なんかいつも持っているといい。

「ああ、この人なら上げたいな」

という時に、ないと困るだろ。だからそういうようにして持っていたらいい。お金のことなんかいいよどうでも。そのためにお互いに維持費を出してやっているんだから。

「われは汝を忘れじ、また汝を棄てじ」

という。人間は、忘れてもらいたいようなことを一生懸命に覚えて、覚えてもらいたいことを忘れたりする。サタンの角度だ、そういうのは。〔壁に掛けてある特別集会での集合写真を見て〕ここにたくさん居るよね、逃げて行ったやつが。けれども、私はその人たちの最も善いところにおいてその人たちを覚えています、正直。うそじゃないです。それでなければ私は本当の聖霊のひとではなくなる。向こうがこっちをどう思うと、そんなことはいいよ。私はその角度で生きている限り、神さまは私を棄てないことは確信があるから。

申命記の６章12節を開こうかな。

「12**然る時は汝慎(つつし)め　汝をエジプトの地　奴隷たる家より導き出(いだ)ししエホバを忘るる勿れ」（申命記６・12）**

イスラエルのために神さまはこういった神を忘れてどうするかと。ところが、忘れた時がだいぶあるということが、申命記の後の方にいくつか出ているんですが、まぁ一々いいでしょう。

大体、「忘れた」という例が非常に多いんです、あるいは「忘れるな」というのが。「忘れませんでした」とか、「私はお前を忘れない」という場合がむしろ少ないようだね、このコンコルダンス〔聖書語句集、用語索引〕を見ても。まぁ、イザヤ書の44章21節のところだけははっきりとそれこそ忘れないように。

我々自身が即ちこのキリストの「忘れな草」ということ。自分の名前は忘れていいんだ、忘れな草みたいに。そうすると神さまを忘れない。キリストを忘れないものとする。その実質は、言うまでもなく、御霊が宿るときにはっきりとそのことは忘れるも忘れないもなくなってしまうような現実になるわけです。「忘れまい」なんていう意識はもういらなくなる。

「ここにあるではないか。ここにいらっしゃるではないか」

と。棄てないとか、忘れないとかいうことをもうひとつ乗り越えた世界に入る。ということは、そのものと、相手と一つになっている世界。一つになっている世界は、「忘れるの、棄てるの」という概念をもうひとつ乗り越えてしまう。それが本当の「忘れな草」だ。

「わがうちなるキリストを見よ」

という世界です。

では終わります。讃美歌の259番「天なる主イエスの」を歌います。